

令和5年 5月31日	農作物病害虫発生予報 6月	山口県病害虫防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------	----------------------------

～目次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病害虫】	2
	【その他の病害虫】	7
III	参考(予報の見方、気象予報)	8

I 予報の概要

農作物名	病害虫名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
イネ	縞葉枯病	平年並	—	—
カンキツ	かいよう病	平年並	平年並	前年並
	黒点病	平年並	—	—
	ミカンハダニ	やや多	やや多	多
ナシ	黒斑病	平年並	平年並	前年並
	黒星病	やや多	やや多	多
果樹全般	カメムシ類	やや少	やや少	少

お問い合わせ先

TEL (0835) 28-1211

FAX (0835) 38-4115

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 イネ縞葉枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	—	—	移植時（箱施用剤） 多発時には幼穂形成期までの本田防除

(2) 予報の根拠

- ア イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカの5月下旬のコムギにおけるすくい取り調査では、20回当たり成幼虫数は166.8頭（平年61.2頭）で平年に比べ多かった（+）。
- イ 昨年、イネ縞葉枯病の発生は認められなかった（-）。
- ウ 現時点でヒメトビウンカの多飛来は認められていない（-）。
- エ 気象予報では、気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

- ア 休耕田の雑草等はすき込み、畦畔の雑草を刈り取る。
- イ ヒメトビウンカの増殖源であるイネ科雑草、イネ科牧草、ムギ類等の周辺で育苗しない。
- ウ イネの生育初期に発病が認められた場合は、できるだけ発病株を抜き取る。

<防除のポイント>

- ア 移植時にウンカ類に効果のある箱施用剤を使用する。
- イ ヒメトビウンカは、6月上旬に多飛来することがあるので、今後の予察情報に注意する。

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	6月上旬、6月下旬

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、新葉での発生ほ場率0%（平年2.6%）、発病葉率0%（平年0.1%）、発病度0（平年0.0）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、降水量はほぼ平年並（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

ア 発病した枝や葉は伝染源となるので、できるだけ除去する。

イ 防風樹や防風ネットなどの防風対策を行う。

<防除判断>

ア 南津海、いよかん、ネーブル等の発病しやすい品種で開花後の防除を実施していない場合は、6月上旬と6月下旬の2回防除を実施する。

イ 発病しやすい品種で、既に開花後の防除を実施している場合は、6月下旬に防除を実施する。

<防除のポイント>

コサイドDFやZボルドーなどの無機銅水和剤を散布する場合は、薬害を低減するため炭酸カルシウム水和剤（クレフノン）200倍を加用する。

2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	—	—	1回目 : 6月上旬 2回目以降 : 防除後の累積降水量が200~250mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

気象予報では、降水量はほぼ平年並（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

剪定枝や樹上の枯れ枝は、伝染源となるので、できるだけ除去するとともに、園外に持ち出し処分する。

<防除判断>

予防散布が基本なので、予報内容の防除時期に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

「せとみ」は病斑が大きくなり、外観に及ぼす影響が大きいため、防除時期が遅れないように留意する。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	防除の目安を超えたとき (防除の目安) 雌成虫の寄生葉率30~40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5~1頭以上

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率26.3%(平年10.1%)、寄生葉率5.2%(平年1.6%)で平年に比べやや多かった(+)。

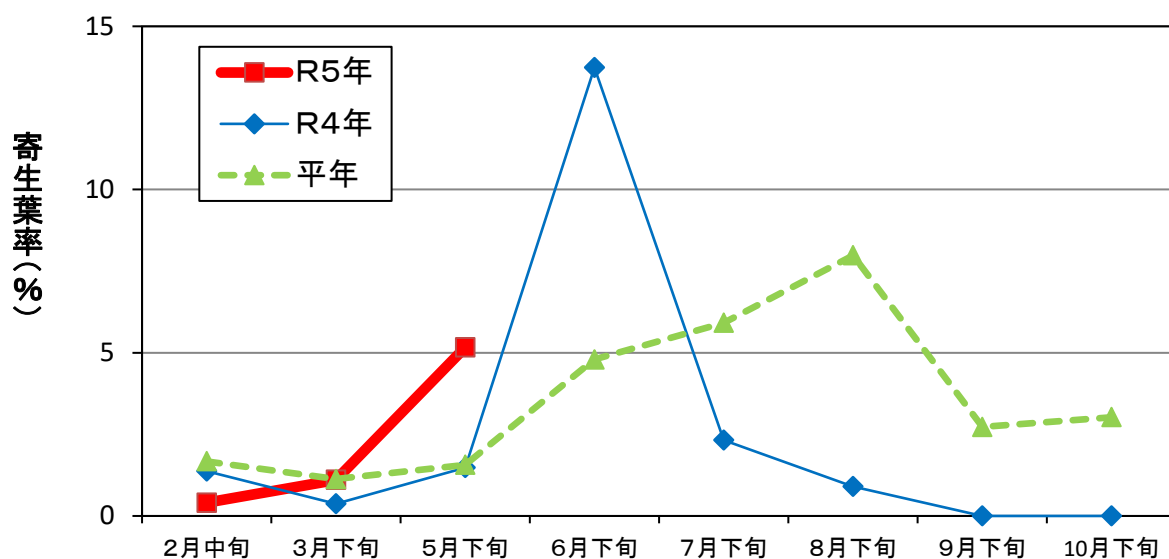
イ 気象予報では、気温は高い、降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 発生量は、ほ場によって大きく異なり、冬期、春期のマシン油乳剤による防除を行っていない園で多発することがある。また、気温の上昇に伴い急激に密度が増加することがあるため、定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。

イ ハダニ類の天敵を保護するため、6月中~下旬のハダニ防除は、マシン油乳剤を散布する。ただし、樹勢の弱った樹は、旧葉が落葉することがあるので避ける。



ミカンハダニの発生推移

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	6月上旬、中旬、下旬の3回

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年1.1%）、発病葉率0%（平年0%）、発病新梢率0%（平年0.0%）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、降水量はほぼ平年並（±）。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 徒長枝の発病が多くなる時期であり、徒長枝の先端まで薬剤がかかるよう丁寧に散布する。

イ 耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。

2 黒星病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	7～10日間隔の散布を7月上旬頃まで

(2) 予報の根拠

ア 5月下旬の巡回調査では、発生ほ場率13.3%（平年6.7%）、発病葉率0.6%（平年0.1%）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 気象予報では、降水量はほぼ平年並（±）。

(3) 防除対策

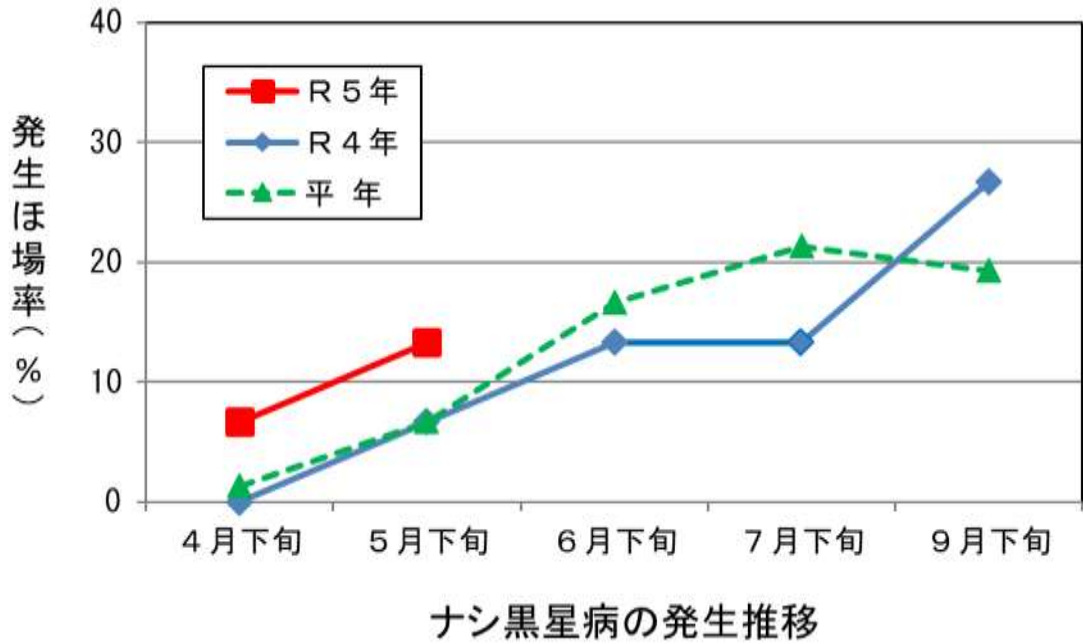
<防除のポイント>

ア 発病した果実と葉は伝染源になるので、見つけ次第除去し、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

イ 薬剤が果実と新梢にかかるように、丁寧に散布する。

ウ DMI剤（殺菌剤コード3）には耐性菌が出現しているので、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他の薬剤を使用する。

エ 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。



果樹全般

1 カメムシ類 (チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

- ア 4月21日～5月20日の予察灯(県内3か所)の誘殺数は2頭(平年33.0頭)で平年に比べ少なかった(－)。
- イ 5月1～20日のフェロモントラップ(県内3か所)のチャバネアオカメムシの誘殺数は5頭(平年93.0頭)で平年に比べやや少なかった(－)。
- ウ クサギカメムシの隙間トラップによる越冬量調査(10か所)では、1トラップ当たり21.2頭(平年21.7頭)で平年並みであった(±)。
- エ 気象予報では、気温は高い(+)。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

- ア ネット(網目4mm以下)で園全体を覆い侵入を防ぐ。
- イ 有袋栽培では大きめの袋、二重袋を使用し、袋かけは遅れないように行う。

<防除判断>

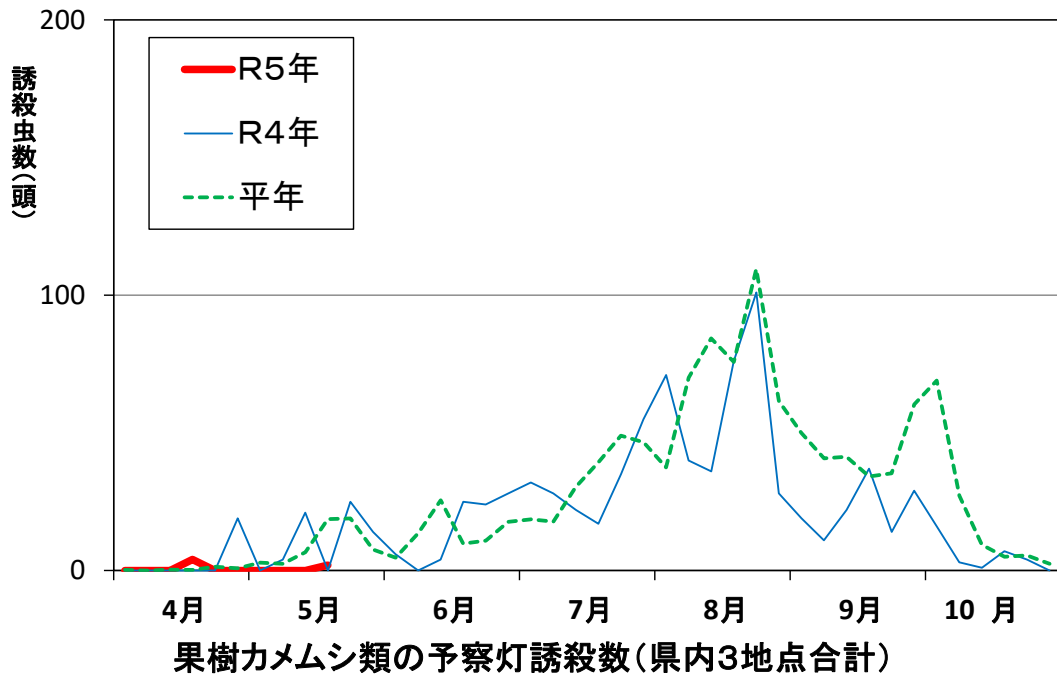
- ア 園地内への飛来を確認したらすぐに薬剤散布を行う。ライトトラップ※を利用すると飛来を確認しやすい。
- イ 薬剤散布後は残効期間を目安に園内を観察し、再度飛来を確認した場合は、

追加の散布を行う。今後の発生予察情報に注意する。

※ 「園地内ライトトラップを利用した果樹カメムシ防除対策マニュアル（簡略版）」を山口県病害虫防除所ホームページ「主な病害虫の発生生態と防除対策資料」に掲載

※ (<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/61925.pdf>)

【その他の病害虫】



2023年5月20日

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年(%)	平年(%)	
イネ	イネミズゾウムシ	平年並	平年並(予察灯)	前年並(予察灯)	—	—	箱施用剤による防除を行う。 箱施用剤により防除を行わなかったほ場で成虫密度が100株当たり50頭以上であれば本田剤による防除を行う。
	ニカメイガ	平年並	平年並(予察灯)	前年並(予察灯)	—	—	前年、巡回調査ほ場では発生未確認
カンキツ	そうか病	やや多	やや多	少	10.5	2.6	罹病葉は見つけしだい除去する。
ナシ	赤星病	平年並	平年並	少	6.7	6.7	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（5月25日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	20	30	50
降 水 量	30	30	40
日 照 時 間	40	30	30

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	10	10	80
2 週 目	40	30	30
3～4 週 目	30	40	30